

紹介

薩摩秀登著

『ブラハの異端者たち』

本書は、我が国では珍しく中世チエコ史を専門とされる薩摩秀登氏が、フス派時代のボヘミアの歴史を一般向けに書き下ろした著作である。順を追って内容を紹介していく。

序章では、中世から近世にかけてのボヘミアで、なぜフス派運動という全ヨーロッパを揺るがす教会改革運動がおこったのか、という本書のテーマが明示され、その際薩摩氏は、国王、貴族、市民という三者の関係を中心に考察をすすめていくことを述べている。前著『王権と貴族』（日本エディタースクール出版部、一九九一年）では、国王と貴族の関係がテーマであったが、扱う時代も下った本書では、ようやく前二者に市民も加わっているのである。

第一章では、まずフス派運動に至るまでのボヘミア社会の変化をみていく。周知の

ようにドイツ人の東方植民はボヘミアにおいても盛んに行われたが、その影響としては、都市建設に際して様々な特権を与えられていたドイツ人が富裕市民層を形成し、都市において反ドイツ人感情が見られるようになったこと、そして、開墾によって貴族たちの経済力が上昇し、領邦身分を形成して王と争える実力を蓄えたことが挙げられる。プシエミスル家の断絶に際して貴族たちは、シチリア金印勅書に認められたボヘミア人による国王選出権に基づき、ルクセンブルク家のヨハンを新王に選出している。彼の息子カールは皇帝としても即位し、ブラハはその宮廷都市として繁栄するが、薩摩氏は、その繁栄は基幹産業をもたない、いわば空虚な繁栄であったことを指摘し、遺産の負の側面にも目を向けている。また、聖職者の世俗的権力と教会の財産が増大したのもこの時代である。

第二章はまさにフスの時代を扱い、教会改革を求めて始まったフス派運動の多面的な性格を検討している。コンスタツ公会議におけるフスの処刑に対してボヘミア、モラヴィア貴族たちの集団での反発を或いはその後フスを支持する人々が始めた二種

聖餐が貴族たちの間にも広まったことの理由を、薩摩氏は「ボヘミアとモラヴィアに加えられている侮辱、特にフスとイエロニームの処刑に対する抗議の意思表示」と捉えている。既にブラハ大学における「国民」の権利再編成の過程で、中世的なシヨナリズムが表出していたが、ボヘミアに対する十字軍が組織されるに至って、チエコ王国とチエコ語を守るための戦いが意識されるようになる。

第三章では戦争の展開と終結後の変化を考察する。さて、皇帝ジクムントの十字軍に対する戦いは、見方を変えると国王（王位継承権保有者）対貴族、市民の戦争でもあった。ここで重要になるのが、聖ヴァーツラフの王冠諸邦という概念である。カールの時代に作られた王冠には、「国王よりもさらに上位にある国家の神聖な象徴という制度的意味」が付与されていた。そのため、貴族や市民は自分たちを王冠諸邦の担い手として意識し、国王に対する反抗もそれにより正当化されたのである。この戦争中、貴族たちは教会領を接収して勢力を著しく拡大し、戦争の事実上の勝利者といわれる。また、ブラハを筆頭とする都市も政

治意識を高めた。ルクセンブルク家断絶に伴い、貴族と市民は、ボヘミア貴族イジールを新王に選出した。

カトリックとフス派の共存を目指した困難な時期を扱っているのが第四章である。度重なる国外からの圧力に苦慮するイジールに対し、「宗教的結束よりも身分の結束の方を重視する」貴族たちは、これを自分たちの権利を拡大する好機とみていた。イジールの死後、ヤゲウォ家の下でカトリックとフス派の和平が締結されたが、薩摩氏は、この和平が貴族の支配体制の安定強化と不可分に結びついていたことを指摘している。またこの時期、政治意識を高めた市民は、裁判権の区別や経済的問題（醸造権など）をめぐって貴族と激しく争うようになる。

第五章では、ハプスブルク家の統治と二度の反乱が扱われる。シュマルカルデン同盟の動きに呼応した一五四七年の反乱は失敗した。プラハをはじめとする諸都市はフス派戦争以来築いてきた自治を喪失したにもかかわらず、ボヘミア統治の必要な協力者とみなされた貴族たちへの処罰は寛大なものであった。しかし、一六二〇年ピール・ホラの戦いの後、多くの貴族がボヘ

ミアから追放され、或いは亡命しハプスブルク家の支配が確立する。この事件は、ボヘミア国家が身分制国家から絶対主義国家へと転換する画期を為したといわれる。薩摩氏は、そのような変化を認めつつも、ボヘミア社会の連続性に注目する。確かに都市の自治喪失は大きな変化であった。だが、一七世紀以降のボヘミア貴族は、「ピール・ホラ」以前からハプスブルク家に忠誠を誓いつつ支配的地位を享受していた者たちであり、ボヘミア社会はその後も貴族的性格を強く維持していたのである。

以上、内容を簡単に紹介してきたが、最後に気になった点を挙げさせていだきたい。本書では、全体としてフス派運動に関する叙述が大きな位置を占めている。ところが、フス派運動それ自体の歴史を描くことを目的としていないために、時折フス派運動に直接関わりのない話が展開される。それも、ボヘミアとプラハの歴史を描き出すという著者の意図するところではあるが、フス派運動に焦点を絞ったほうがもっとすっきり読めたのではないだろうか。とはいえ、本書はフス派運動における、宗教改革、中世的ナショナリズム、都市自治

などの多様な側面を、ヨーロッパ全体の動向を視野に入れたつつ描き出すことに成功している。また、フス派運動の裏側に一貫して存在する国王と貴族の対立構造を明らかにした点などに、前著から続く著者の問題意識がみられる。フス派運動のみならず、中世から近世にかけてのボヘミア史の格好の入門書である本書の出版を機会に、ボヘミア史家を志す人が一人でも多く増えることを願っている。

(B6判 二九二頁 一九九八年八月)

現代書館 二八〇〇円)

(藤井真生 京都大学大学院生)